

第11回 BELCA賞 表彰式

さる5月13日(月)、BELCAの理事会・通常総会と合わせ、第11回のBELCA賞表彰式を挙行し、ロングライフ部門5件、ベストリフォーム部門5件の計10件を第11回BELCA賞として表彰いたしました。ここに当日の様をお伝えいたします。



会長挨拶

BELCA会長 高木 丈太郎

会長の高木でございます。

表彰式の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本日は御多忙のところ受賞者の皆様を始め、多数の方々のご出席を賜り、誠にありがとうございました。

さて、平成三年よりはじまりましたBELCA賞は、今回の表彰で第十一回を迎えることとなりました。

今回も、全国から優秀な物件を多数ご応募いただきましたが、これも所有者の方々をはじめとする関係者の皆様の本賞に対する深いご理解の賜物であろうと考えております。

おかげさまをもちまして、BELCA賞の知名度も年々高まり、ユニークな賞としてご評価いただいております。このことから良好な建築ストックの形成に寄与するという賞の目的を着実に果たしていただいているのではないかと考えております。

本日表彰いたします十件を合わせますと、BELCA賞の表彰件数は百件を超えることとなります。百を超える数となりますと、さまざまな用途や規模の建築物が含まれてまいりますので、優良な建築ストックとはどのようなものかというイメージを、広くお示しできているのではなかろうかと考えております。

BELCA賞がここまでこれられたのも、本日ご参会の皆様を始め多くの方々のご指導・ご鞭撻の賜物と深く感謝申し上げます。

また、選考にあたりましては、選考委員の方々が大変ご苦心されたとお話を伺っておりまして、改めて選考委員の方々には厚く御礼申し上げます。

本日表彰されます物件が、わが国の優良な建築ストックの良き範となるものと確信いたしており、受賞者の皆様に対しまして、深く敬意を表しますとともに、心からお慶び申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。



第11回BELCA賞選考総評

BELCA賞選考委員会委員長 内田祥哉



BELCA賞は適切な維持保全を実施したり、優れた改修を行った既存の建築物のうち、特に優秀なもの関係者をロングライフ、ベストリフォームの2部門により表彰し、もってわが国における良好な建築ストックの形成に寄与することを目的に設けられた。

平成3年よりはじまったBELCA賞は、これまでに10回、合計で96物件の建築物の関係者を表彰し、今回の表彰で第11回を迎えることとなった。

第11回の募集にあたっては、10回までの経緯を踏まえ規程などの見直しを行った。

主な見直し事項は、部会制による選考を廃止し、ひとつの委員会にて両部門の選考を行うよう改めたこと、表彰物件数を「各部門5物件以内」から「両部門合わせて10物件以内」としたことなどである。

これらの見直しにより、ロングライフ、ベストリフォームのどちらの部門での表彰がふさわしいか、あるいは両部門の表彰件数の調整をどうするかといった議論も迅速に行えるようになった。

BELCA賞の知名度も年々高まり、少しずつではあるがユニークな賞として評価をいただいていることから、第11回のBELCA賞も全国から多数ご応募をいただいた。

選考の結果、今回はロングライフ部門5物件、ベストリフォーム部門5物件、合計10物件を第11回のBELCA賞として表彰することとなった。

ロングライフ部門で表彰する五物件については、二十年以上にわたって関係者が不断の努力で維持保全に努めてこられた優秀な物件ばかりであり、「建築物の長寿命化」という今後われわれが解決していかなければならない課題に対し、ひとつの答えを与えてくれるものと期待している。

一方、リフォームへの関心が年々高まっていることから、ベストリフォーム部門は毎年激戦が続いている。応募物件のレベルも高く、関係者の努力がしのばれる物件が多かった。五つの表彰物件はこの激戦の中から選ばれた優秀なものばかりであり、リフォームに関し新たな知見や手法を提供してくれるものと期待している。

BELCA賞の表彰物件は東京都内の物件が多く、前回までの96物件のうち41物件が東京に集中するという状況にあった。前回の表彰においても、合わせて10の表彰物件のうち5物件が東京都内の物件という状況だったが、今回は2物件だけとなりBELCA賞も少しずつ地方へ浸透しているのではないかと期待している。

また、これまで表彰物件のなかった沖縄県から初の受賞物件が出たことも喜ばしく思っている。

今回表彰される物件が、わが国の優良な建築ストックの良き範となるものと確信しており、受賞物件の関係者に対し、深く敬意を表したい。

今後ともBELCA賞が発展し、わが国の良好な建築ストックの形成に寄与することを願うものである。

第11回BELCA賞ロングライフ部門選考講評

BELCA賞選考委員会副委員長 三井所清典

新しい体制で始まった第11回BELCA賞選考委員会は、その審査についても従来とは少し違った方法で進められた。すなわちこれまで、ロングライフ部門とベストリフォーム部門の二つの審査部会を設け、それぞれに審査を進め、最終的には合同する全体審査委員会で表彰物件を決定する方式をとってきたが、今回選考委員会は終始部門に別れることなく応募された両部門の物件を審査した。その結果、これまでのように審査のはじめに、応募物件をどちらの部門で審査することがより適切であるかという問題はなくなり、現地審査の過程を含め、その属性についても慎重に審議することができた。

「大阪厚生年金会館」は、1968年の竣工以来、社会的状況の変化に対応して、増改築、改修が繰り返されて建物が維持されているが、それは毎年作成される整備計画書により丁寧に実行されている。これは、設計者、施工者、管理者の日常的な共同体制による成果である。多目的ホールを中心とする施設利用者は今でも110万人を超えており、公園を前にして建つ姿は、町の風景として大阪の街になじんでいる。

「沖縄ハーバービューホテル」は、1975年の沖縄国際海洋博覧会のときに建設され、そのデザインや色彩からも、地域性を表現した沖縄の代表的ホテルとして多くの人々に利用されている。建設当時の社会的、地域的事情から、設計や工事に多くの課題を抱えたようであるが、それを誠実に克服し、その後の改善においては省エネルギー対策や客の要望解決などに巧みに応えている。なお、すでに次の改修計画も立案されており、長寿命化に努めている。

「上高地帝国ホテル」は、1977年鉄筋コンクリート造の地上4階、地下1階の建物として建設されたものであるが、これは従前の木造のホテルのイメージを保存して建て替えられたものである。そのため、内外に多くの木を用いているが、継承性、自然との調和、更新の容易性などへの配慮に優れ、厳しい冬の半年を閉鎖するという特異な経営方式にも拘らず、建物はよく維持されている。顧客に多くの常連の愛用者がいることはロングライフの良い証である。

「ひろしま美術館」は、1978年竣工したもので、以来、市の中央公園の中で変わらぬ姿で時を刻み続けている。設計の段階から「時と共に美しさを増す」ことを意図し、設計と施工一体で行った様々な長寿命化の工夫により、今日まで大きな改修を必要としていない。もちろん、建物の維持管理は、設計思想を尊重して練られた維持保全計画書に基づいて継続的に実施されており、ロングライフの質を確保している。

「立教学院諸聖徒礼拝堂」は1918年に建設されたレンガ造の建物である。関東大震災では妻壁の上部と屋根が壊れ、切妻の屋根から寄せ棟屋根に改修され今日に至っている。

今回、一層の長寿命化を計るためレンガ造建物としては、日本で初めての免震レトロフィットによって地中梁を含む地下構造に大改修を行い、地上部にも耐震補強を実施している。卒業生や学生達にとってほとんどその改修が気づかれていないほどの成功であるが、同時に大学の維持管理体制のあり方が高く賞されたものである。

ロングライフ部門で表彰された建物の長寿命のあり方はさまざまであるが、肝要なことは何といても維持管理体制のあり方である。今回の審査においても建物の持っている高い質の継続性、高い設計思想とその尊重がいかに大切であるかを気づかされる。なお、立教学院諸聖徒礼拝堂は、ベストリフォーム部門への応募であったが、選考委員会で慎重に審議し、応募者の了解を得てロングライフ部門で表彰した。

第11回BELCA賞ベストリフォーム部門選考講評

BELCA賞選考委員会副委員長 内井昭蔵

BELCA賞も11回を迎え、本年度から新しい体制により選考を行った。選考委員の交代と若干の選考方法の手直しを行い、この顕彰制度の更なる充実を図った。

選考方法は応募書類と資料に基づき選考委員全員の出席のもと、慎重に審議を重ね最終的には投票により第二次選考に値する作品を選定した。

建築のリフォームに関しては応募状況から考えるに、近頃の地球環境問題に対する一般社会の関心が高まったことによるスクラップアンドビルト的な取り壊しに対する反省や建築の歴史から価値に対する認識が高まったことを実感した。

応募作品はさすがにベストリフォームというだけに優れたものが多く応募者の自信を垣間見ることができた。結局、第二次選考に回ったのは10作品だったが選にもれたものも決して悪かったわけではなく評価に値するものが多かった。最終的には更に検討の末、以下の5作品となった。

「秋田公立美術工芸短期大学・秋田市立新屋図書館」は秋田市郊外にある食糧倉庫群の保存再生である。1934年に国立農業会館として建設されたものを形態と構造を生かし、美術工芸系短期大学と地域図書館と生涯学習拠点など合わせ、教育文化センターを構成している。又、新設の大学研究棟との新旧の対比的美しさを充分に発揮された優れたリフォームであると評価された。

「カラコロ工房」は松江市にある長野宇平治設計による旧日本銀行松江支店のリフォームである。ここに旧銀行の面影を残しながら、カフェ・展示室などの商業施設を入れガーデンテラスを挟んで新築の工房棟が建てられ、これも新旧のデザインの対比的美しさをつくり出している。

「京都芸術センター」は京都の町衆が醸金して作った番組小学校の一つ、明倫小学校を芸術センターに改造したものである。京都市内にはこのように児童数の減少により廃校となる小学校がいくつかあるが、これらは京都市の文化施設、コミュニティ施設などに改造され新しい市民活動の拠点となっている。この芸術センターは旧小学校の構造をたくみに利用し、市民の芸術意欲をかき立て、作品発表の場として生き返っている。

「大和銀行虎ノ門ビル」は時間が経過し、老朽化したビルに手を入れリニューアルして生き返らせた例である。耐震性を補強するためのグリッドフレームを外観デザインに利用し、更に利用しながらの改造をなしとげるなど、これからのビルのリニューアルの方法として多くの示唆を与えるものと評価された。

「フロインドリーブ」は神戸の有名なベーカリーだが、ヴォーリス設計による旧神戸ユニオン教会が廃墟寸前のところをフロインドリーブの経営者がこれを購入、名建築の保存ができた。教会のもつ精神性を感じさせる内外の造形はベーカリーとして又、ティールームとして生かされ神戸らしい独自の雰囲気をつくっている。歴史的価値のある建築をこのような形で保存ができたのは建築を愛するオーナーの存在があったからと思う。

リフォームには様々なやり方があるが、その条件で忘れられないのは本体の建築が優れた芸術性又はデザインであることが条件だということだ。ロングライフにしてもベストリフォームにしても建築のもつ芸術性・デザイン性がベースになれば存続不可能である。

BELCA賞の概要

BELCA賞は、適切な維持保全を実施したり、優れた改修を実施した既存の建築物のうち、特に優秀なものとの関係者をロングライフ、ベストリフォームの2部門により表彰し、もって良好な建築ストックの形成に寄与することを目的に設けられた、我が国初の既存建築物の総合的表彰制度です。

BELCA賞は平成3年に創設され、今回の表彰が11回目となります。

受賞者には（社）建築・設備維持保全推進協会会長より表彰状が贈られ、また建物所有者に対しては、文化勲章受章者・文化功労者の彫金作家帖佐美行氏の手による賞牌が贈呈されます。

表彰の種類として、ロングライフ部門とベストリフォーム部門の2部門が設けられています。

ロングライフ部門は、建築物のロングライフを考慮した適切な設計のもとに建設され、長年にわたり適切な維持保全が実施され、建築後20年以上を経過した建築物のうち特に優秀なものを表彰するものであり、ベストリフォーム部門は最近改修され、その改修により画期的な活性化が図られ、改修後1年以上を経過した建築物のうち特に優秀なものを表彰するものです。

なお、受賞者はロングライフ部門については、建物所有者、設計者、施工者、維持管理者の四者であり、ベストリフォーム部門については建物所有者、（改修に際しての）設計者、（改修に際しての）施工者の三者です。

また、今回の表彰物件まで含めた受賞数は各部門53件ずつの合計106件です。

なお、これまでにBELCA賞に選ばれた物件の概要や審査評をとりまとめた書類を御用意いたしております。送付を希望される方は事務局（電話03-5252-3873、担当：情報管理部）までお申し付け下さい。

第11回（平成13年）BELCA賞選考委員会の構成及び委員

委員長	内田 祥哉（東京大学名誉教授）
副委員長	内井 昭蔵（滋賀県立大学環境科学部教授）
副委員長	三井所清典（芝浦工業大学建築学科教授）
	岡本 宏（清水建設（株） 執行役員設計本部長）
	木村 信也（エヌ・ティ・ティ都市開発（株） 代表取締役常務）
	佐々木恒己（新菱冷熱工業（株） 取締役第二工事事業部長）
	平倉 章二（（株）久米設計 取締役専務執行役員設計本部長）
	細田 雅春（（株）佐藤総合計画 取締役副社長）
	本城 邦彦（（株）竹中工務店 取締役）
	丸田 豊（日本ビルサービス（株） 取締役業務管理部長）
	水出 清仁（（株）ベイテクノ 取締役社長）

（順不同・敬称略・所属や役職は選考当時のもの）